學としての家政學

溝上泰子

一

家政學が科學として成立するか、否かは問題である。凡ての科學の自立性は、その對象の自立性と、これに對する一定の見方、(Perspective, attitude) 態度が要求される。そして一定の對象を、一定の見地からながめることによつて、これを規定する一定の學的方法が定まる。しかも對象の性質は、これに應ずる一定の態定を要求し、反對に態度は對象の性質に適合せねばならない。この對象と態度の關係からして、對象を規定する一定の方法が生れる。かくて方法とは、研究の對象に適合した (angemessen) 問題提出及び問題解決の仕方である。從つて對象の性質を無視した、對象に適合しない方法は、方法というべきでない。しかもこの方法は純粋性を要求する。方法の純粋性とは、對象とその規定とが、斷絶することなく——即ち中途で他の方法や原理を混入しないで——終局まで矛盾なき聯關をもつことである。かくて凡ての學の成立には、その對象の獨自性、即ちその科學が固有な對象領域を有すること、方法の純粋性とによつて始めて確保せられると考えられる。

假りに、家政學が學として存在することをゆるすとすれば、それは精神科學群に屬するか、自然科學であるか社會科學であるか、その何れにも屬さない獨自の科學領域を有するものか等が問われねばならない。更に家政學獨自の對象は何んであるか。この固有の對象を規定する方法は如何なるものであるか。以上の問題は學としての家政學に問われねばならない問題である。これらの問題の解決なくして、家政學の客觀的地盤はあり得ないし、學としての家政學は成立し得ない。

先づ家政學は精神科學の領野に屬するものであるか？　一般に精神科學は人間の精神現象を對象とする科學である。勿論、これに對する態度の相違によつて、諸種の科學が成立するが、ディルタイが「吾々は自然を說明し、精神を理解する」(Die Natur erklären wir, das Seelenleben verstehen wir.) と、いつているように、ここに於ては、因果律は適用されない。家政學がこの科學群に屬さないことは、言を俟つまでもない。何故ならば、それは自然科學の對象となるべきものをもつているからである。然らば、家政學は自然科學の領野に屬するものであろうか？　自然科學が對象を因果律の法則に從つて一般化することを任務とする限り、家政學は明らかに、自然科學に還元し盡されない。何故ならば、そこには精神科學の對象となるべきものをもつからである。次に家政學は社會科學に入るべきであろうか？　社

會科學が人間生活、社會生活を對象とすることに於て、又それが高いヒューマニズムに根ざしているという點に於て、家政學はここに、その原理を見出し得るかのように見えるが、兩者は自らその對象と方法を異にする別々の科學である。何故ならば、兩者共に人間社會を對象とする限り、共通の原理に基くが、家政學の對象が、家庭、家族に限定される限り、社會科學にのみ還元できないものを家政學はもつからである。然らば家政學とは如何なるものであるか。從來、家政學の直接の對象は家政であり、家政とは家庭、家族の物的並びに精神的幸福を維持するのみでなく、これを增進してゆく行爲であるといわれ、從つて、「家政學とは家政を對象とする學問的知識を謂う」と、いわれている。又「家政學とは自然科學、社會科學に關する知識及び技術に於て、家庭生活及びこれに類する集團生活の物的並びに人的兩方面の運營、管理、調整に關し、綜合的研究をなす學問である（日本女子大學家政研究室）と、いわれている。何れにせよ、家政學の對象が「家庭生活現象に限定されていることが首肯される。生物學の對象が生物現象であり、物理學の對象が物理現象であり、經濟學の對象が經濟現象であり、更に教育學の對象が教育現象であるように、家政學の對象は家庭生活現象である。つまり家政學の固有の對象は家庭生活現象である。ここに於て、家庭生活現象と教育現象に類似性がみいだされる。卽ち教育現象はありのままの存在としての現象だけでもなく、又理念的存在（價値）としての現象だけでもない。まことに存在と價値との關係からおこり、課題としての存在から價値に高まる一種獨自の現象である如く、家庭生活現象もまた存在から價値に高まる獨自の現象である。

しかも家庭現象はあらゆる生活現象をふくむが故に、教育現象の如く單純ではない。人はよく科學を價値科學（哲學、美學等）と存在科學に體系化するが、諸科學の體系に於て、家政學はその兩者の中間——中間の意味は兩方にまたがるという意——に位置をしめるものであろう。かくて、家政學は單一の原理によつて基礎付けられない綜合科學である。（綜合科學という點に、家政學のもつ學としての弱さを見出さざるを得ないのであるが。）

從來、「家庭科」、「家政科」の內容が、家庭生活現象の全體性、綜合性の故に、單なる調理、裁縫等家政を處理する技術のみであるかのように思われ、「家政」は單に家庭生活の管理（狹義の management）であるかのように誤認されている。現に文部省に於ては、「家庭科は技術の科目だ。勿論、いかなる技術も理論の裏付けをもつものである」（教員養成課長玖村敏雄）という。小・中・高等學校の家庭科の內容が、直接家庭生活を處理してゆく力として技術を重視せねばならぬことは理解できるが、それと家政學とを同一視することはできない。人間がその出生と成育を家庭・家族の中に享け、自らもまた家庭を形成するということは、人間の決定的な存在樣式である限り、この家庭、家族を固有の對象とする家政學は成立するし、させねばならない。しかし二つの理由によつて、その學としての確立が困難であることを認めざるを得ない。その一つは、家庭生活が全體的、綜合的であり、單一の原理で處理し得ないこと。その二は人間にとつて必然的な家庭、家族も、時空を問わず常に同一であり得ない。それはあらゆる人間の

共同態と同じく、歴史的に變化するものであり、人間の歴史はかような家族的集團の漸次的機能喪失の過程であるともいえる。殊に生産力の非常な發展、商品生産の飛躍的な發達、交通の擴充、グーテンベルグの印刷機の發明、アメリカ大陸の發見等によつて、有機的封建社會から近代社會への歴史の轉換は、家族集團の機能の喪失に著しさを加え、「家は着物を着換える場所である」とアメリカの一學者をしていわしめるにいたつている。從つて家政學の內容は著しく固定性をかぎ、しかもそれ等を單一の原理で體系化、組織化することは非常に困難である。しかし家族的集團縮小への變化の極點に於て、兩性の愛情に基く結合及びその結果としての子女の生殖と養育のための家庭が見られる限り、家政學の對象は存在し、それの把握の方法も見出さるべきである。

「家庭及び家族生活に對する教育は、今や、技術的價値からむしろ社會的價値に重點のおかれる段階に到達している」(Education for home and family living has reached the stage of development where emphasis is placed upon social values rather than technical values; —Mary Beeman, "New Developments in Home Economics Education,") と、いわれている。かように、人間の決定的存在樣式としての家庭、家族が人類の安寧を取扱う場所として、その人的關係(Family-Relation)に於て、家政學の中核をなすにいたつている。

家庭・家族が單に消費集團として、重視されるのみではなく、むしろ家庭が子供の「基本的性格(Basic Bersonality)を養い、またその「行動の型」(Behavior Patterns)を形成するという觀點から、家政學が見られるようになる。アメリカの多くの學者が、人間の性格は大體、一歳から五歳、長くて七歳までに形成されてしまうという。この立場から、過去二十年間、アメリカの家庭生活問題への自覺がたかまり、子供、青年に對する責任が、力强く關心の的になつている。

以上によつて、家政學の對象は家庭・家族生活現象であり、しかもその中核は家庭・家族の人的關係卽ち家族關係にあること、更にその對象の把握は單一の原理に基く方法によつて規定できないこと、從つて家政學は綜合科學であることが、明らかになれば充分である。更に論述の歩を進めてみよう。

二

人間は必ず親の子として、男女何れかの性をうけて、家庭・家族の中に生まれる。如何なる人も單なる個人として生まれるのではなくて、一定の家族、一定の民族の成員という歴史的、社會的存在として生まれる。このことは凡ての人に絶對的に共通な自明な事柄である。從つて人間の存在は單なる身體、自由人としての個人の理性活動、更に情意作用からはじまるのではなくて、一定の共同體的人間として共同體的身體をもち、共同體的に思惟し、共同體的に情感し、共同體的に意欲することからはじまる。かように人間は本來社會的であり、親子・男女・兄弟・姉妹・朋友・師弟・民族等の關係を離れて存在するものではなく、これらの社會關係こそまさに人間そのものであるといい得

る。しかし他方かような種々な社會關係に入り得るものとして個人でもなければならない。卽ち人間は一面に於て社會そのものであり、他面に於て社會的關係を離れ得ざる限り、その構成員たる個人である。かくして人間は社會的、個人的であり、個人的、社會的であるという矛盾的性格をもつものである。かような人間の矛盾的性格は個人と社會を對立せしめて、個人をもともと非社會的或は前社會的なものと思惟して、社會をこの非社會的のものから導出しようとする立場からは解明されない謎である。いうまでもなく人間の社會生活は、極めて複雜であるから、その社會的關係の中には個人と個人とが、法則とか規定とかいうような一般的なものをなかだちにして結合する所謂結合社會なるものもある。しかしこの結合社會は人間の社會性にとつては第一義的なものではない。卽ち人間は一般者をもつて結合する結合關係に入らなくても人間であることは可能である。然るに親子と男女の關係を捨象して、凡そ人間を思惟することはできない。何故ならば、親の子として生れない人間がない限り、親子は人間の本來的な存在の仕方であり、本質的規定である。この規定を拔きにして、人間を規定することはできない。同じように男女の性關係もまた人間の本質的規定であり、本來的な存在の仕方である。從つて性を抽象して人間の正しい理解はあり得ない。かくして親子關係と男女關係は人間の歷史的社會性にとつて根本的なものであり、この根源的規定を內容としてもつ社會結合こそ、まさに家庭・家族である。ここに於てはその社會關係は構成されたものではなくて、自ら生成するものである。從つて社會と個人とは客體的に對立するものでなく、一體である。兩者は對立的二者として客體的關係にあるのではなくて、己れの性格をもつて結合する一者である。かように己れをもつて結びつく人間關係を共同體というならば、共同體に於ては團體が常に己れであり、己れが常に團體である。かような「己」としての性格を最もよく現わす共同體は、「家族」である。從つて如何なる場合にも家に生れる人間の生の營みは單なる獨立の個人としてのそれではなくて、一定の家族の生命流の中に生存する一定の家族的人間としての生の營みである。若し人間がこれのみにつきるものであるならば、人間はいまだ獨立の行爲的主體ではあり得ない。從つて家庭・家族とは前個體的人間の生活集團である。卽ちここに於ては人間は縱のつながりに於ける親子の關係と橫のつながりに於ける男女の關係を二大根幹として、自然に生成する家族共同體の生命流の中に出沒するところの全體生命である。しかし他方人間は家族以外の多くの社會關係に入り得るものとして個人でもある。つまり親子關係と兩性關係という人間の根源的規定を構造契機とする家庭・家族は自然的であり、人間社會の地盤であり、人間の母胎である。胎兒が胎內に於て胞衣の袋の中にあり、臍帶によつて母體と一體であるように、人間は誕生と同時に家族という袋の中につつまれるのである。胎兒にとつては母胎は端的に與えられる運命的所與であるように、家族という母胎もまた、個人にとつては運命的所與性をもつ自然的地盤であり、個人はここに於て血と性のつながりによつて一體である。この自然的地盤は胎兒と同じように、その構成員たる個人に對しては完結性と封鎖性とをもつ所謂、ベルグソンのいうところの閉じられた社會の模式的類型である。しかし單なる血と性の自然につながる家庭・家

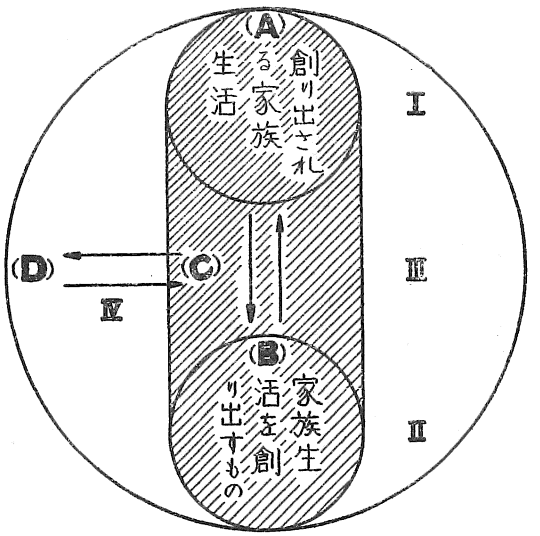
族は現實に見られる家庭・家族ではない。現實の家庭・家族は家（建物としての）と土地（最廣義に生産形態を意味する）と同時根源的に不可分に結合している。否、それと本來的に一體である。從つて生産形態によつて、又その變化につれて家庭・家族の形式、內容、機能が變る。吾々は現に、生産の場所と消費の場所とを異にする都市の家庭・家族と生産と消費の場所である農村の家族との相違を餘りに明らかに見るのである。都市家庭に於ては、家長制家族主義は稀薄であるが、過小農社會に於ては、村又は家族の地主又は家長を中心とするヒラルキー的構造が（民主主義社會の今日尙）力强くいきている。ここに於ては人間を人間として愛し、その人間的能力を認めて相互に協力することはできない。人間の自由と平等も彼等には意識され難い。いうまでもなく對等的人格の意識は許されない。かような家族に於ては、家族の全體性が優位であり、――この全體性は血と性の自然に基く家族の全體性ではなく、――人間は人間であるよりも、家のための人間であることを要求される。人間の運命は、彼がその家で占める位座によつて決定される。そこでは人間の主體性は認められない。

以上のように家庭・家族の全體が、たとえ自然的全體であれ、要求的全體であれ、吾々はここに、家庭・家族の全體としての存在を見のがすことはできない。それは個人より別の存在である。卽ち家庭・家族は「個々の成員からなる社會を、祖父母や兩親や、あらゆる年齡の子供たちや召使たち、つまり家の中に集合している人間を皆とりまとめて、一つの全體として概念することが問題な譯だ。……こうしたものたちが全體としてある種の音をだし、他のどんな集まりとも區別される一種模倣すべからざる觀念を作り出す。」（アラン　哲學入門　下）この一つの全體は最も自然的本能的生命としての社會單位である。ここではそのメンバーは自己のすべてを投げ出し、他と滅私的に結合している。これが家政學の研究對象である。しかしこれはまた社會學の研究對象にもなり得る。已に述べたように、同一對象もそれに對する態度、一定の見方によつて自ら研究の方法が規定され、異つた科學が成立する。同一の家庭・家族もこれを社會學的に見るか、家政學的に見るかによつて、自ら兩科學の相違となる。然らば家庭・家族に對する家政學的態度とは如何なるものであるか。それは優れた家族生活を創り出そうとすることである。換言すれば家政學は優れた家庭、家族生活を創り出すこと（Creating）の科學である。

三

家政學を優れた家庭・家族生活を創り出すことの科學と規定したいま、吾々は家政學の體系に於て四つの問題群を抽出することができる。（Ⅰ）創り出される家庭・家族生活、換言すれば、創り出されるものの側面に出る問題群、（Ⅱ）創り出す主體の側に出る問題群、（Ⅲ）（Ⅰ）と（Ⅱ）との關係に於て見られるもの。（Ⅳ）更にかような家庭・家族は社會の單位であるが故に、家族生活と社會――廣義には世界――との關係に出てくる問題群、これら四つの問題群が家政學の內容となり、この組織化、體系化によつて、家政學が學として成立する。生活現象に於て、家庭生活現象に關係しないものがないほどに、家庭・家族生活は複雜である。從つて家政學が以上のように、組織化

されない限り、家政學は雜學のそしりをまぬかれないし、まことに、學として成立することは不可能である。その本來の性質と學としての成立後、いまだ日が淺いために、今日の家政學は雜學といつても、過言ではないであろう。それ故にその內容は、あらゆる科學に還元し盡せるものである。『果物の中のペクチンの抽出法』は、完全に有機化學に屬するし、『餅の靑かびの研究』は細菌學に屬する。家族構成員の人的關係は倫理學の問題でもあるし、心理學の、又は社會學の問題でもある。あらゆる生活現象が、家政學の對象となるためには、これらの問題が家政學的態度、見方によつて、整理され、處理されねばならない。この爲に考えられたものが以上の四つの問題群である。次にこれを圖示して、家政學の輪廓を明らかにすることにしよう。



Ⅰ (A)は創り出される全體としての家庭・家族生活を示す。
Ⅱ (B)は全體としての家庭・家族生活を創り出すものを示す。
(A)(B)を同じ大きさで示したのは、嚴密な意味で「つくられるもの」と「つくるもの」とが一つであることを示す。
Ⅲ (C)は(A)と(B)は一つでありながら、二つであり、相互作用的であることを示す。
Ⅳ (D)は世界を示す。(D)と(C)とは相互作用的存在。

上の圖に從つて、各部位に生ずる問題の輪廓を明示することにする。

(Ⅰ) 創り出される家庭・家族生活

家庭・家族が血と性の自然的なつながりであることは、已にのべられた。しかし、問題は、それを出發點として、更に進められるべきである。

(a) 家庭・家族の構成員の數とその結合型

吾々が「家庭」「家族」の二語を敢えてつかつている所以は、「家庭」によつて、夫婦・親子だけの血緣關係の結合(Home)を示し、「家族」をもつて兩親と子供の外に祖父母、伯叔父母その他の血族或は他人を含む結合(Family)を意味している。家族構成員が漸次小人數化し、それに伴つて家政の內容が變化しつつあることは、世界共通の事實である。機械文明が最高度に發達しているアメリカ合衆國に於ては、最近の統計について見ると、一世帶平均人員は都鄙を問わず二人が最高である。吾が國に於ても、都市家族の結合は、夫婦とその未婚の子から成る家庭が多いが、農村家族に於いては、前記以外の血族又は他人(奉公人や身寄人等)を含む家族が多い。この背後には國や地域社會の社會的、經濟的事情があることはいうまでもない。以上二つの結合型に加えて、山岡榮一氏はその著、「社會學序說」に於て、第三型として、父母の一方又は兩方を失い片親他人又は片親以外の血族によつて子供が養育されている場合をあげている。殊に大戰後の吾が國の現在に於ては、これは社會問題、經濟問題として大をなしている。農村家族の多い吾が國に於ては、「家族」と稱せられる結合

型が多いように思われるが、漸次家庭型に移行するうごきを示している。農村家族に於ては勞働力を必要とするが故に、親・子・孫と三代乃至四代にわたる人々が結合しているが、內容的にみると、親子・夫婦の複合的結合にすぎない。長男が妻帶して、子をもうけると、これに對して兩親と次男、三男等が心理的に强く結合する。これが極端になれば、二つの家庭グループがやむなく「一つの家」にいるにすぎなくなり、家族間に暗鬪が絶えない。これは家族關係の問題として、みのがし難い問題である。かくて究極的には、家族は兩性の愛情に基く結合とその結果としての子女の生殖と養育の集團となるであろう。

以上は構成員の結合形式による家族の類型であるが、家族員の職業は家庭・家族の內容に變化を與える。第一次世界戰爭後に於ては、夫婦共稼ということは、いまだ觀念にすぎなかつたが、第二次世界戰爭後の今日に於ては、それは事實となつている。これによつて所謂從來家政といわれたものの內容に大きい變化が生じている。それのみでなく夫婦・親子の人的關係に變革があらわれている。これもまた家政學に於てみのがすことのできない新しい問題である。

(b) それの數の多少はあれ、構成員が一つの全體としていきているものが家族社會である。しかもその結合は人性の本來に基いている。性の結合としての夫婦は性の必然性に基き、血の結合としての親子は血の必然性に基いて、生理的にも心理的にも精神的にも、「一つのいのち」をいきているのが家族である。しかしこの必然的全體結合から夫婦(男女)の間柄と親子の關係を抽出して考察する必要がある。

夫婦 性的にいえば、反對の性的索引であり、精神的に見れば、男性的な精神と女性的精神の必然的結合である。古くはギリシヤの哲人アリストテレスは「人間の質料因は何か。これは「Menses」である。動力因は何か。それは「Semen」である。(男性は能動的存在として形相を、女性は受動的存在として質料因を象徵する)というている。又アミエルは「女は保存、傳統、男は進步である。この二つがなければ、生命——家族も人類も——ない。この二つの力がなければ歷史もない。歷史はこの二つの力の產物である。進步をその父とすれば、傳統はその母である。たとえ社會、國家の組織が如何に變化しようとも、この法則に變りはない」というている。近くはバーナード・ショウは「男の頭の中では、種族の自覺が發達する如く、女の心の中では存在のもくろみが發生する。生の經營は兩省の協である」といつている。かように男性と女性の相違を言表したものが、昔からの多くの哲學者、文學者の作品の中に見られる。ショウの作品「あなたさまにはわかりませんよ」You Never CanTell または「人と超人」Man and Superman に於て、繰り返されている生の力(Life Force)は、世界がそれ自らを進展させる原動力であるが、これは男女の協力に於ていとなまれるというのである。このように相反する男性的な力と女性的な力の結合、協力によつて、生が營まれることを吾々もまた肯定せざるを得ない。ここに結婚の意義があり、從つて男女の生に對する延いては家庭・家族に於ける根源的役割の相違がある。それ故にこそ、夫婦の間柄に於ける德は融和である。

親子 子供の出現によつて、夫婦の結合が觀念の領域から降りて、

存在に到達したものということになる。父と母との分裂には色々の理由があるにもせよ、この二つの天性は子供に於て結びつき、その結合によつて生命の貯えを見出すということは間違いない。「こうなると夫婦愛は一つの事實であり、共同生活は一つの生きものである。心と心との結合は望めば解消できぬ筋合いのものでもないが、現實の結合は、子供によつて分離できない」(アラン)という。子供の生長が表わしているように、夫婦は一旦この舟にのり込んだ以上引き返すことはできない。子供は日々の勞作である。かくて父母の子に對する德は扶養である。しかし同じように親子の關係でありながら、「父と子」と「母と子」のつながりに相違がある。母子の關係は唯一の全くの自然愛である。(この自然愛は本能的なものだけではない。むしろ、アガペ的な愛を意味する。)少しも選ばず、今に何になるかもわからない他者(子供)を自分の生存のすべてをあげて養う。父の子への慈愛は直接には子に向うよりも、むしろ母をして慈愛をつくさしめるという方向に向う。母はその慈愛が溺愛に陷る危險を父の介在によつてふせがねばならない。かくて父は母の愛を媒介にし、母は父の知性を媒介にしなければならない。かくて子の成長は知と愛という二つの相反する力を父母に要求する。

兄弟姉妹　子供が幾人いるにせよ、父母子の關係は三角形の重複であるが、子供の間柄は夫婦の共同に於けるように、相手の存在の隅々まで參與しない。相互の間に祕密がのこされるということは、その共同に妨げとならない。父母にいえないことを兄弟姉妹で語り合い、かばいあう。この寛容な德が、兄弟姉妹の特徴である。

(b)　夫と妻、父母子、更に祖父母や召使、これらのものが、一つの家に集つて、一つの全體としていきている。かうしたものたちが全體として或種の音を出し、他のどんな集まりとも區別される模倣することのできない雰圍氣をつくり出す。これが家族は一つのいのちとしていきているという所以である。これが人柄と同じように家柄といわれるものである。今日のようにすべての現實を物質から解釋し、それに依つて人間の行動までも規定しようとする考え方には、個人精神とか、家族精神とかいうものは否定されるであろう。しかし吾々はニコライ・ハルトマンやマックス・シェーラーが、個人精神に認めた精神發展の四段階を、家族精神に適應して、一つの全體としていきている家族共同體の構造を明らかにする。即ち家族は土地と家という物質的なもの、生命あるもの(家族の身體性)更にその上段の心理的なもの、それによつて荷われている精神的なものの四段階に區分され、下位は上位の荷い手であり、上下は不可分に結合する。

かように家庭・家族を分析してみるとき、廣範の家政學の內容も、これによつて整理、統一できる。即ち第一段階の物的なものに於て、問題になるものは、家(建物としての)及び土地の問題である。第二段階の生命的なものに於て問題となるものは、先ず家族の身體性、衣、食、休養等である。第三段階は心理的なものである。家庭・家族のあらゆる部分・狀態・雰圍氣に於て、無意識のうちにあらわれる精神を家族的心意という。門前に立つただけでその家族の生活の內容がうかがわれるのも、玄關の履物を見ただけで、その家族の生活秩序がよみとられるのも、みな家族的心意の間斷なき作用である。又家族的感覺

として、家族的味覺、嗅覺、觸覺、聽覺、視覺が考えられる。かような立場、見方から、家政學の內容を見るとき、從來、家政學の內容にならなかつたもので、重要なものが取り上げられるのではあるまいか。例えば家庭・家族內の「音」は、家政學に於て從來問題にならなかつたが、人が育ち休養する場としての家庭・家族に於ては重要な問題である。一つ一つ例證することをやめるが、かような觀點からすると、重要な內容を取り上げることができる。更に第四段階の精神的なもの、これは家族そのものがもつ精神で、決して家族構成員の精神を加算して生ずるものではない。親子が相互に教化、啓發し、夫婦が相補い、相助けるという複合的人倫關係に家族精神の本質がある。これは最も純粹な人倫のパラディグマである。長幼・老若・男女という異質的なものの相補的調和こそ、家族精神の本質である。この立場から家政學の對象である家庭・家族をみるとき、家族員の人格關係という問題をはじめ、今日まで家政學の問題として洩れていたものが、取り上げられる。例えば今日「家族關係」の內容として、多く家族制度の史的考察や民法的解釋がとり上げられているが、それと共に家族員の人格の力動的關係が問われるべきである。

以上に於て、家政學の對象となるべき家庭・家族生活に就いて大要が述べられた。更に論述は進められねばならない。

四

「家政學は優れた家庭・家族生活を創り出すことの科學である」という規定に基いて、(Ⅰ)に創り出される側面の問題群が輪廓づけられた。次に(Ⅱ)の問題群として、創り出す主體に就いて論述せねばならない。幸福な優れた家族生活は、家族の人々の種類と、家族の人々の行動の方向によつて規定される。家族員の凡ては幸福な優れた家族生活を創り出す責任をもたねばならない。一人の人が幸福な家族生活を創り出すことはできない。しかし一人の人がその幸福を破壞することができる。從つて家族員の第一の責任は幸福な優れた家族生活の創造を分擔することである。家族の幸福は家族全員の努力によつてはじめて創り出されるものである。かく考えると、創り出されるもの(A)と創り出すもの(B)とは同一である。

吾々はこの事實をあらわす爲に、前圖に於て(A)と(B)とを同じ大きさであらわしている。しかし長幼老若凡てに家族創造の責任があるということは、責任の大小を問うものではない。長短相補の「調和」的存在を本質とする家族關係に於ては、存在そのものが責任の分擔を意味する。生きた全體としての家族生活の創造に於て、最大の責任をもつべきものは父と母である。家族という全存在が父の知性で方向づけられ、母の愛でささえられるとき、家族生活は創られ生長する。しかし父の知と母の愛は二つのものではない。知は愛であり、愛は知である。(西田幾太郎) 父も母も家族の一員でありながら、しかも家族そのものを育て創るというはたらきは、常に家族に內在しながら家族を超え、これをながめる立場に立たなければならない。母の愛が父によつて代表される知性を通して、家族に働くときにのみ、母は眞に家族の創り手、育て手となり得る。反對は父の場合にもいいうる。かような父と母との家族に働く力は、所謂公式的なものである。しか

し、家庭・家族に於て、直接に正しい態度、正しい關係を持續する責任は母にある。從つて母は父よりも直接的な家庭・家族の創り手である。かような觀點から、(Ⅱ)の側に取り上げねばならぬ問題がある。

從來の家政學に於ては、家庭・家族の生活の物的現象が多く取り上げられて、人間のいきている家族ということが忘れられているようにさえ思える。殊に「家」が人類の安寧を扱う場所として自覺されてきた今日、それの創り手としての母は、如何なるものであるかとその本質が問われねばならない。即ち母性の形而上學、性の哲學、愛の哲學、母性と文化等が究明されねばならない。

一般に個體、民族、國家等の生命は二重性をもち、從つて二重構造をもつ。これを手懸にして、國家の文化を分析してみよう。假りに、三角形A・B・Cをもつて國の文化をあらわす。頂點Aは文化創造の尖端である。この點に生ずる文化は高度の科學、藝術、道德、宗教等であり、その形成者は個人である。しかも、その作品は時空を超えて、世界の共有財産となる。このことはパスカルの原理、カントの哲學、ベェートウベンの音樂、ロダンの彫刻、キリストや釋迦の宗教等を考えれば、容易に理解される。つまりA點の文化は固有名詞でよばれる個人の業績である。しかしかような文化はそれのみで創造され、存在するのではない。何故ならば、三角形が頂點Aだけで存在しないと同じように、A頂點の文化は底邊BCによつてのみ存在する。勿論、反對も眞である。ここで頂點に形成される上層文化に對して、底邊BCに沈積する文化を基層文化として考えて見よう。日常性の中に浸透している文化即ち、民謠、俚諺、民藝、民踊等はこれらの代表的なものである。更に風俗、習慣、儀禮等も基層文化として前者に對立しないであろうか。基層文化は作者をもたない。歴史と共に生活に沈澱した名もない大衆の作品である。かようなものこそ身についた大衆の教養というものであろう。しかしこれら文化の二層は決して文化自體がこのように截然と分離しているものではない。兩者はもともと一體である。しかも二者である。

かように考えると、頂點Aに於て文化は新に創造され、底邊BCに於て文化は生活の中に沈積する。これを力で表現すれば、A點には尖端的革新的力がはたらき、底邊BCには傳統的保持的力が働く。この相反する力の統一の中で文化は形成され、保持される。更にこの二つの異質的な力を性の立場から考察すると、革新は男性的——父性的な力で行使され、傳統は女性的——母性的力である。吾々はここで男性的——父性的なものと男性又は父性と、女性的——母性的なものと女性又は母性と同一視してはならない。何故ならば、男も父も女性的、母性的なものをもち、この反對もいいうるからである。しかし一般的には、男や父は尖端的革新的力をもち、女や母は文化を傳え、荷う面に力をもつものである。何故ならば男女の本來の區別が、子を産むものと産まないものにあるからである。文化の傳統の持續は民族の傳統を前提にするし、民族の傳統は産むことによつて果される。それ故に、産むことは傳統を荷う力である。このことが現實化するためには、「家」が要求される。産むことは家の外ではなされないからである。しかし傳統は單に過去的なものではなくて、その持續、保持が一本の糸が過去から、未來へ流れるようなものではない。過去も未來も同時

に藏しており、過去を孕んで未來を指示するものが傳統である。從つてそれは持續することによつて、豐富になるものである。かようにして傳統は人のいきる大地、大氣、水のようなものである。そこからあらゆるものが生れる地盤である。

かような文化の在り方から、人間の役割が自らきまつてくるのではあるまいか？　高度の文化はそれが高ければ高い程、大衆の日常生活の豐さ、殊にこれを荷う女性的――母性的力によつて裏付けられている。反對に潛勢力ともいうべき女性的――母性的力が大きい程、その表現としての文化は偉大であろう。『子を產むと產まない』ということで、男女の性は一應の區別はつくが、しかしこれも絕對的なものではないといわれる。從つて嚴密には性は個人的差異ということができるであろう。しかし家庭・家族生活を直接に創る母の本質的究明は、かような文化と母性という問題の解明によつても、考えてみなければなるまい。一人、一人の人間が自分を世界のどこに位置付けるかということが、結局人生の探究である。母が如何に自己を家族・國家・世界の中に位置付けるかということが、同時に家族の創造である。以上では（Ⅱ）に關する本質問題の性質とその內容を簡約に記述したのである。更に具體的な問題として、青年や子供を立派な人物に育てるには、母が如何なる性格であればよいか、又その性格を如何にして發展さすかの方法をしらねばならない。「汝自身を知れ」ということは、困難なことであるが、母はこれなくして他を知ることはできないし、家族生活のすぐれた創造者になることはできない。

五

家政學は優れた家庭・家族生活を創り出すことの科學であるという定義に基いて、この學のもつべき問題は、更に（Ⅲ）に移らねばならない。ここに生ずる問題は創造主體の母から、創られる家庭・家族生活への作用方向に關するものと、反對に創られる家族生活から、創り手としての母への逆作用方向に關するものがある。前者に屬するものは廣義の子供の育成に（これは家庭・家族凡てを子供とみる）關するものと所謂、從來の家政科の內容になつているところのものである。卽ち食物、衣服、住居、看護、家庭經濟、管理等である。これらの諸內容が何れも他の科學、專門の技術に吸收されうるものであるから、家政科は雜學の譏をまぬかれない。更に生產組織が變化し社會的經濟的組織の變革につれて、家庭・家族の機能が喪失してゆくので家政學は他の嚴密科學のような科學性と方法の純粹性を確立することが困難である。しかし家政學は從來よばれているような單なる家政に關する科學ではなく、優れた幸福な家庭・家族生活を創り出すことの科學である。この規定の中には家庭・家族の人的關係に重點があるようなひびきがある。「家族は社會の根本である」（The family is the bedrock of society. Education for Family,）かように云われる理由は、家庭・家族は本來の性格として民主的である。それがその眞實性を發揮するならば、家庭・家族こそ眞の意味の民主社會である。この意味に於て家庭・家族は社會の根本であり、人類社會の民主化の原動力である。この爲には母が、家庭・家族內に於て正しい態度、正しい

人的關係を維持し得る力がなくてはならない。それが爲には人間をしらなくてはならない。これは從來なされて來た單に家政上手な主婦型の母には、到底できないことである。藝術、宗教、哲學、心理學或は社會學等によつて、人間をしることが如何に、家庭・家族創造者である母にとつて重大であることであろうか。この面に於て、如何に現在の母が缺けていることであろうか。

人間の存在は必ず相互媒介的である。その作用も相互作用である。親子、師弟、話者と聽者等の如く、凡て人間存在は關係的存在である。たとえ聽者が話者に無言で對しているにもせよ、兩者は相互作用關係にある。ここからして、母の家庭・家族に對する創り手としての作用は必ず創られる家庭・家族から還つてくる。封建家族の道德は母に無限、絶對の忍耐を要求した。(勿論、自主的絶對忍耐を否定するものではない。)それ故に母のする家事は「當然である」として、これに對して殆んど人間的關心はないのである。現にいまだ多くの農村家族にはかような惡風がみられる。父も子も如何に母が雜事に疲れていても、無關心である。「母というものはかくあるものだ」と思いこんでいるらしい。家庭・家族內の雜事はつまらないこと、それをやる女性、母性はつまらないものという封建的遺風が如何に家庭・家族の正しい發展を拒み、母の正しい働きを妨げてきたことであろう。現に幾多の婦人が、殊に農村婦人が過勞に疲れはててていることであろう。假りに「母」というものが、家庭・家族內の事の責任者であるべきものであるとしても、その任務を樂しく、明るく遂行させてやろうという人間的愛情が、夫から、子供から妻へ、母へはたらかないということが不思議である。まして家庭・家族の優れた在り方への努力は全員のなすべきことである。女ひとりの力で到底、家庭・家族の幸福はつくられるものではない。女をかかる努力の先頭にたてるべく他の家族員が、母の仕事を助けるべきである。そのことは先ず自分のことは自分ですることになり、更に相互に救け合わねばならない。この意味に於て、男子にも家庭科を履修せしめることは大事なことである。何故ならば家庭・家族形成はその構成員各自の責任であり、家庭・家族を形成しない人間はないからである。「もしも家政(Homemaking)や家庭生活、育兒等が、生活のため、または人生を樂しむ好機として考えられるとするならば、家政科教育は男の人も困惑せず、嫌々ではなく、家事や育兒等を樂しみながら、共に分つことのできるように、家庭管理、家政、保育の仕事を紹介する工夫を案出しなければならない」と(Bess Goodykoontz and Beulah I. Coon and others, „Family Living and Our School," いつている。

吾々は更に家政學の問題群の(IV)に入らねばならない。大家族は漸次小家族へ、家族の機能が次第に國家・社會に吸收されてゆきつつあることは、世界共通の事實である。この歷史の現段階に於て、吾々に明らかに認識されることは、一方に親子・夫婦の小人間集團としての家庭・家族と他方に國家という大人間集團の對立していることである。(國家は更に大きい社會に移つてゆくきざしをもつているが。)家庭・家族集團はその構成員もその構えの全貌を、直接に見ることができる。しかし國家の全體を直視することは、吾々には不可能である。

所謂これは考えられる全體であるが、しかし單に考えられるものではなく、體驗されている全體である。それは對立しているかのように見える家庭・家族と一體である。それを吾々は政治によつて實感するのである。政治による統制は吾々に絶對性をもつ。單にこれだけ考えて見ただけでも、家庭・家族と國家・社會・人類は一つのものであることが自覺される。優れた家庭・家族の創造が、單に家庭・家族の研究・努力によつて決してなされるものでない。反對に國家・社會の改革は、家庭・家族の改善が第一に要求される。「家族とその生活の安全と高揚が文明の第一の目的である」(The security and elevation of the family and of family life are the prime objects of civilisation.— Charles W. Eliot.—) と、いつている。幸福な優れた家庭・家族を創ることが社會を明るく眞實なものにする力である。家庭でつくられる正しい人間關係が社會の人間關係を正しいものにする。父母の正しい愛情に育まれた人間の素直な生の力が、社會の暗さと鬪う力となる。從つて優れた家庭・家族を創り出すことの科學としての家政學に於ては、家庭・家族と社會との關連に於て、問題を取り上げ、この究明に於て、家政學を組織だてねばならない。例えば農村家族の後進性は、決してその家族の生活現象だけの究明によつて解決できるものではなく、それがおかれている自然的條件、人文的基盤、歴史的背景をも共に研究しなければならない。このことは單に農村にだけいわれることではなくて、全領域の家族についていわれることである。このような立場から、家政學の中に、取り込まねばならない問題群は、自然地理、人文地理、歴史、經濟、政治、法律等に關係ある內容である。しかもこれらは、どこまでも家政學の立場、態度に於て取り上げらるべきものであり、それによつて、それらは家政學の一領域を構成するものとなる。

吾々はここに至つて、この勞作をむすぶことにする。これは「學としての家政學」を打立てんとする試論にすぎない。從つてその內容は莫然として不明瞭で、その論旨は不徹底であるそしりを免れない。しかしこの試論が一つの礎石となつて、次の礎石へのつながりになることを信じて、莫然とした家政學に、歩、一歩、科學としての體系性と組織を與えてみようと思う。—一九五二・三・一〇—